

# 公共図書館、自治体との連携

## 【報告】

なんでも相談してもらえ図書館を目指して一県立図書館等との連携

井戸本吉紀 (三重県立津高等学校 (学校司書))

### 1. はじめに

私は司書職として三重県に採用され、三重県立図書館に配属されました。県立図書館では、2年間の職員研修部署での勤務を挟み、20年近く県民サービスに従事しました。そして、平成30年度に三重県立津高等学校図書館に異動となり、現在に至ります。「学校図書館」の勤務経験は2年にも満たないのですが、自分の取組がみなさんの参考になるところもあるのではないかと思います。

### 2. 三重県立津高等学校について

明治13(1880)年1月に創立された三重県津中学校を前身とし、来年度に創立140周年を迎える歴史ある本校は、「自主・自律」「高い志」などを「育みたい生徒像」として掲げています。生徒数は1,000人以上、教員数は80人を超えています。

#### 育みたい生徒像 (津高 マネジメントシートより)

- ・日常において、「自主・自律」を実践できる、知・徳・体の調和のとれた生徒
- ・主体的に学び、自らを律し、粘り強く努力することで、生涯にわたって自己実現を図るとともに、心豊かで、高い志を抱いて社会に貢献できる生徒

本校の特色としては、二学期制や65分授業などが挙げられます。他に、SSH (Super Science Highschool) 指定三期目となっています。三期目は三重県初となりました。探究活動では、「リベラルアーツ」を重視しているのも特徴の一つです。

### 3. 津高図書館について

#### (1) 特徴

津高図書館には、三重県学校図書館協議会事務局が併

設されており、教員が事務局長として、研修や読書感想文全国コンクール、読書感想画中央コンクールなどに取り組んでいます。

図書購入費は約70万円、蔵書冊数は約2万5千冊となっています。延べ床面積が大きいことが本校図書館の特徴で、三重県学校図書館協議会の事務室、会議室、ギャラリー、書庫などが併設されています。

#### (2) 概要

津高図書館の蔵書構成は文学がおおよそ35%を占めています。雑誌は12誌、新聞は6紙あります。新聞のうち、読売新聞と日本経済新聞は、本校のNIE (Newspaper in Education) 活動の関係で、日本新聞協会から1年間寄贈していただいているため、通常は4紙となります。新聞は家庭科や社会科の授業と課題で利用されています。

#### (3) 利用状況について

貸出冊数は昨年度約4,000冊で、前年度比170%となりました。ただ、一度でも借りた生徒・教員の割合は、29%で、全校生徒が使っているとはいえない状況です。

	貸出冊数			一度でも借りた人の割合 (%)	
	29年度	30年度	前年度比	29年度	30年度
1年生	880	1,279	145.3%	26%	28%
2年生	625	1,419	227.0%	26%	30%
3年生	367	498	136.7%	12%	20%
生徒計	1,872	3,196	170.7%	21%	26%
職員	510	853	167.3%	65%	74%
総計	2,382	4,049	170.0%	23%	29%

### 4. 昨年度の取組について

昨年度の取組を、「見つける」「学ぶ」「繋がる」の3つの方針に整理してご紹介します。

#### (1) 見つける お手伝い

「見つける お手伝い」とは、「世界のこと、日本のこと、地元のこと、友だちのこと…。自分の知らないこととの出会いを図書館が提供する」という方針です。文化講演会、朗読会、ビブリオバトルなどを開催しています。特徴的な取組として、「図書館ミュージアム化計画」を夏休みに行いました。津高生に知見を広めてもらう目的で、図書館内に県内外の博物館等30館以上のポスターとチラシを展示しました。

冬には、日本新聞協会のご協力で、全国 126 紙の同じ日の新聞を展示し、新聞ごとの主張の違いを知ってもらう展示を行いました。この展示は、後で社会科の課題で利用してもらいました。

#### (2) 学ぶ お手伝い

「学ぶ お手伝い」とは、「授業、探究、部活、行事…。興味を持ったことをより深めるための情報を図書館が提供する」という方針です。修学旅行や台湾研修、マレーシア研修の関連コーナーを開設するなどしています。

その他、2年生社会科の授業で、調査、発表資料づくり、実際の発表までの会場として図書館を利用してもらったりしました。

津高では、世界や三重県の課題に対して、生徒に考えさせる授業が行われています。例えば、コミュニケーション英語では、発展途上国の課題をデザインで解決する方法について英語で話し合い、英語で発表をしました。また、放課後に三重大学の地域イノベーション学研究科の先生に指導してもらった「津高キャリアプロジェクト」では、「10年後の津市をデザインする」をテーマに市長発表を目指して活動しました。そういった活動には、コーナーを作り、専用の図書館通信で紹介を行っています。

#### (3) 繋がる お手伝い

「繋がる お手伝い」とは、「気づいたこと、学んだこと、悩んでいることについて対話し、新たな気づきを得ることを、図書館がサポートする」という方針です。

例えば、津高生は、本の返却時に本の感想を書いて返してくれる割合が非常に高いのが特徴です。そういった感想を図書館通信や展示で紹介することで、本による対話のきっかけづくりになるように取り組んでいます。

また、本についておしゃべりしたり、飲み物を飲んだりして、生徒と先生で本をきっかけに話をしてもらう目的で、「青空図書館」を開催しました。この取組は好評につき、今年度も継続開催しており、すでに2回開催しました。



## 5. 県立図書館等との連携について

### (1) 連携の必要性

こういった津高図書館の取組を進めていく上で、県立図書館等との連携は必要不可欠です。その理由は、主に3つあります。

一つ目は、授業や探究活動など、現在の本校の多種多様なニーズに応えるためです。本校図書館の2万5千冊の蔵書規模では現在のニーズは到底まかなうことができません。

二つ目は、津高図書館のPDCAサイクルを促進させるためです。この場合のPDCAサイクルとは、まずは借り受けた本でコーナーを作り、その利用状況をみて、自館の所蔵に反映させるというサイクルを指しています。

たとえば、今年度は保健室や教育相談室と連携してコーナーを作りました。その中で、利用状況を確認してから、ニーズのあった分野の本のみ購入し、自館の蔵書をよりニーズに即したものに変わっています。

三つ目は、生徒の図書館に対する期待を失わせないようにするためです。本を借り受けて提供するという仕組みは、生徒はもちろん、先生にも知られていません。図書館として最も恐れるのは、試しに本校図書館に来た生徒や先生が、棚に目当ての本がなく、諦めて帰ってしまうことです。それを避けるためには、まずは「棚になかったら司書に相談してください」ということを徹底してPRし、なかった場合は即座に対応することが重要となります。

### (2) 三重県立図書館の物流ネットワーク

この連携の基盤となるのは、三重県立図書館が構築した「物流ネットワーク」です。これは、主に県内の市町立図書館、大学図書館を結ぶ物流網で、県立図書館が集配センター的な役割を担っています。

県立学校図書館は、最寄りの市町立図書館が県立学校との本の受け渡しにご協力いただけることを前提に、この物流網を使うことができます。このネットワークのおかげで、三重県内の図書のやりとりは容易になりました。

## 6. 今後の課題について

本校に赴任した初年度は、様々な活動を手探りに行いました。そして、1年を経て考えたのが、津高図書館の「見つける」「学ぶ」「繋がる」の3つの方針です。今後は、本校の「目指す生徒像」に津高図書館の方針がどのように貢献できるのかを、より深く落とし込んでいく必要があると考えています。

また、津高図書館3つの方針は、本来は、「見つけて」「学んで」「繋がる（発表する）」という学習サイクルに

似たものになるべきと考えています。しかしながら、現時点ではまだ個々の取組が単発の企画になってしまっており、今後の課題と考えています。

このような課題に取り組むため、今年度は4月の段階で、学年主任の先生や保健室の先生にヒアリングを行い、一層のニーズ把握に努めています。

また、古い本を書庫にしまい、本の表紙を積極的に見せることで、館内を魅力的にする取組も行っています。これは、図書館の基礎力の底上げの一環と考えています。

このような連携を基盤とした様々な取組を通じ、「なんでも相談してもらえる図書館」を目指していきます。

---

## 【報告】

### 地域とつながる学校図書館—町役場との連携—

増田典子（三重県立南伊勢高等学校度会校舎（学校司書））

---

#### はじめに

南伊勢高校は、南勢校舎と度会校舎を有する校舎制の学校である。度会校舎は全校生徒170名ほどの小さな学校であるが、生徒と教員の距離が近く、一人の生徒に多くの教員が関わることで日々丁寧な教育が実践されている。

また、本校のある度会町には、町立施設に併設された「図書室」はあるものの、独立した図書館はなく、本校図書館が町内一の蔵書数を誇っている。図書館は地域住民にも開放されており、定期的に来館する住民もいる。

本報告では、本校図書館が地域で行なっている活動として、町と連携した子ども向けイベントと、高齢者施設への移動図書館の取組を紹介したい。

#### 1. 本校図書館について

本校図書館は、管理棟の3階、一年生の教室からすぐのところの位置している。面積は234㎡と広く、所蔵数が約2万冊である。図書館には毎日たくさんの生徒が訪れている。活発な図書館活動を示すものとして、2018年度の統計の一部を紹介したい。

生徒への貸出冊数：6,038冊（一人あたり：36.8冊）、  
貸出利用者率：79%、資料予約数：707冊

多くの生徒にとって、図書館は高校生活になくてはならないもののである。

また、図書委員会とは別に、文化同好会という図書館を拠点に活動している同好会があり、これから紹介する

活動の主体となっている。

#### 2. 町役場との連携が始まった経緯

2014年、度会町は、本校の入学希望者の確保や地域と連携した学校づくり等を目的に、高校活性化協議会を立ち上げた。当時から本校図書館の地域開放は行われていたが、町の関係者及び施設と本校図書館に接点はなかった。同年12月、県立図書館から、図書館のない町を対象とした座談会を度会町で開催したいという依頼があり、このとき初めて本校の図書館担当者と町の担当者とのつながりができた。

その後、町の担当者が初めて本校図書館に来館された。その際、本校図書館が町内で一番蔵書の多い図書館であることを知り、本校図書館を会場とした親子向けイベントの依頼があった。本校としても、地域との連携を望んでいたことから、2015年1月、第1回「南伊勢高校度会校舎図書館へ行こう！」を開催することができた。

#### 3. 町と連携したイベントについて

2015年の第1回「南伊勢高校度会校舎図書館へ行こう！」は1月に開催したが、翌年度からは毎年7月に開催しており、今年で6回目を迎えた。

文化同好会に所属する生徒が中心となり、図書館ガイド、絵本の読み聞かせ、おすすめ本の紹介などを行っている。また、県立図書館も協力してくれ、缶バッジ作りなどの企画を実施している。

図書館ガイドは、本の借り方や返し方の説明、本校図書館の特徴などを紹介する。おはなし会では、絵本の読み聞かせを毎回3人くらいが行うが、生徒が丁寧に読む姿と子どもたちが一生懸命聞く姿に、いつも感動を覚える。また、おすすめ本の紹介では、本の内容だけでなく、その本を薦める理由の中で、生徒自身の体験が語られることがあり、その場にいる大人もすっかり引き込まれてしまう。

また、もう一つ行っているイベントが「おはなしえほん高校生スペシャル」である。こちらは、2015年10月から年1回、度会町中央公民館図書室で開催し、絵本の読み聞かせやゲームなどを行っている。2019年度は、これに代えて、「秋の図書室祭り～南伊勢高校度会校舎図書館から来ました！～」と題したイベントを度会町地域交流センター図書室で開催した。

これらのイベントで大切にしていることは、生徒たちを運営の主役にするることである。町の関係者や教員、司書は生徒たちのサポート役に徹し、当日の運営は生徒に任せている。それがゆえに達成感も大きいようで、もと

もと人前に出ることがあまり得意でない生徒が、このイベントを通じて大きな成長を見せてくれる。

また、このイベントが順調に続いている大きな理由として、町役場と高校の役割分担が挙げられると思う。町役場は広報、参加者募集、受付の業務を担当し、高校はプログラム内容の準備と当日の運営を担当している。町内への広報や参加者募集は、町役場にとっては慣れている業務であろうが、高校側にとってはそうではない。それぞれ得意な業務を担当することで、大きな苦労もなくイベントを続けてこられているのだと思う。



#### 4. 高齢者施設への移動図書館について

次に、町役場との連携の事例ではないが、高齢者施設への移動図書館の取組を紹介したい。2014年3月から、本校の隣にある高齢者施設で行っている、「出前図書館」の取組である。2014年3月に始め、6年目を迎えている。文化同好会の生徒と、顧問である教員と司書が毎回50冊ほどの本を持って、図書館を開いている。長期休暇中を除いて、約二週間に一回、放課後に実施し、年間18回ほど実施している。

2018年度は、平均で1回あたり約14冊、年間合計で231冊の貸出があった。移動図書館を楽しみにしている方も多く、ある利用者は、「ありがとう。高校生が来てくれるだけで、本当に幸せ。」と毎回言って下さる。出前図書館は、単に本の貸し借りの場ではなく、利用者と生徒、利用者同士の交流の場でもある。また、生徒たちは、人に喜ばれる仕事をするにとってもやりがいを感じているようだ。最初の頃は、教員や司書の指示で動いていた



生徒たちだったが、今では自分たちで役割を決め、率先して動いている。

#### おわりに

これまで紹介してきた活動の効果もあり、一般利用者への貸出は増加傾向にある。しかしながら、学校図書館が地域のためにできることには限界があり、公共図書館の代わりにはなり得ない。地域の方々にとって、本校の図書館サービスを体験することが、自分の地域の図書館行政はどうあるべきかについて考えるきっかけになれば幸いである。

今後の目標は、できるだけ長くこれらの活動を続けていくことである。地域の方々には、本校図書館の豊富な資料を役立てて頂きたいし、生徒には、様々な世代との交流やイベント運営の経験を通じて、社会人として活躍できる力を身につけてほしいと願っている。